慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウパニシャッドの根本特徴 : ウパニシャッド研究序説
Sub Title	Some fundamental features of the Upanisad
Author	湯田, 豊(Yuda, Yutaka)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1973
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.18 (1973.) ,p.89- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000018-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 18 (1973)

〔共立薬科大学研究年報
No. 18. 89～98(1973)〕

ウパニシャッドの根本特徴

—ウパニシャッド研究序説—

湯田　豊

Some fundamental features of the Upaniṣad

Yutaka YUDA

(Received, September 22, 1973)

It has long been held in the academic circles that *upaniṣad* comes from upa-ni-sad, "sitting down near". Radhakrishnan, one of the most distinguished philosophers of present-day India, says: upaniṣad gradually came to mean what we receive from teacher a sort of *secret doctrine* or *rahasyam* (*Cf.* Indian Philosophy, Vol. I., pp. 137—138). This is the most prevailing theory of *upaniṣad* at present, and most scholars at home and abroad follow that theory without any criticism.

In defiance of such a predominant interpretation, I do not shrink from asserting that upaniṣad has nothing to do with the secret doctrine whatsoever. I am of opinion that the fundamental thought of upaniṣad would have been open to the public at that time. Upaniṣad has been, I believe, based on *public debates* and *mutual criticism.* If we examine in detail the extant oldest documents such as Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad and Chāndogya-Upaniṣad, we shall be able to confirm that the profoundest ideas of upaniṣad were, as it were, exposed to the glaring daylight of reason. It has to be kept in mind that the newly rising idea of *brahman* or *ātman* peculiar to upaniṣad had been searched for *in public by means of forum of the intellectual atmosphere.*

Even in dialogues between teacher and pupil, husband and wife or father and son, there is no evidence of concealing the truth from its seekers. There is every reason to believe that the spirit of free discussion or thoroughgoing tournament is the underlying tone of such dialogues.

The second features of upaniṣad will be the knowledge (*jñāna, vijñāna,* or *vidyā*), which plays all-important role there. But, I did not discuss this problem in this place, because I had dealt with it elsewhere.

The third features of *upaniṣad* will be the religious vein running through the whole upaniṣads. In short, the ideal of upaniṣad is to be found in *the dissolution of fear and anxiety* (*abhaya*) in virtue of knowledge. *Bhaya* is based on the sufferings from hunger, thirst, affliction, sorrow, delusion, old age or death, etc. Escape from such psycho-physical pains is the mokṣa (freedom) in terms of Indian philosophy.

The sages of upaniṣads looked out for no positive goods in the form of paradise in heaven or happy life here on earth. In ancient India, the goal of the sages, no doubt, consisted in dissolving the anxiety and fear of individual beings and removing

sufferings in mundane life.

To sum up, what I have tried to set forth in this small paper was only these two: in the first place, with regard to upaniṣads, the *knowledge was open to all* who seek to obtain the highest wisdom of life, in so far as they were competent enough; secondly, *everyone was able to dissolve the anxiety and fear of life* with the necessary help of true Self within ourselves (*ātman*).

はじめに

インド思想史においてウパニシャッド (Upaniṣad) の占める地位は，ギリシァ哲学においてプラトンの占めるそれに似ている．プラトン哲学が西洋哲学の源流であるのと同じく，ウパニシャッドもまたインド哲学の出発点である．仏教は無論，中世のインド正統哲学（いわゆる六派哲学）もウパニシャッドの影響を受けて成立したのである．この意味で，ウパニシャッドの思想内容を文献に即して研究することはきわめて重要であるといえる．しかし，わたくしはここではウパニシャッドの哲学を論じることをしないで，それの根本特徴について若干の考察を加えるにとどめたいと思う．

わたくしは，ウパニシャッドの根本特徴を三つの観点から考察する．第一の特徴は，ウパニシャッドが従来説かれているように秘密の教え・秘説 (rahasya, guhya) であるか否かということである．この点については，わたくしはすでに自己の見解を明らかにしたのである（「古ウパニシャッドにおける若干の問題」印度学仏教学研究 14 巻 1 号，昭和40年12月，134—135 ページ）．私見によれば，ウパニシャッドは秘説ではなく**公開性の原理**に基づいている（その根拠については以下の論述を参照されたい）．ウパニシャッドの第二の特徴は**知識重視**である．しかし，ウパニシャッド的な知識はブラーフマナの呪術的な性質を濃厚に帯びており，それが祭祀の知識から発展して来たものであることは明白である．しかし，この第二の特徴については他のところで論じた（「古ウパニシャッドにおける知識論」鈴木学術財団・研究年報 2 号・1966 年 3 月，44—57 ページ）のでここでは扱わない．ウパニシャッドの第三の特徴はその**宗教性**である．ウパニシャッドの理想は単なる知識の追求ではない．それは，何よりもまず，不安・恐怖 (bhaya) の解消である．インド哲学の目標は相対を離脱して絶対者となることである．そして，かかる境地に到達したものには如何なる意味での不安・恐怖も存在しない．これが解脱 (mokṣa) と称せられるものであり，ウパニシャッド的な思惟の発展段階において始めて哲学的省察の対象となるのである．本論文において，わたくしはきわめて簡単に第一および第三の特徴を論じたいと思う．

I. ウパニシャッドの公開性

ウパニシャッド[1]が秘説であって，自己の長男あるいは弟子以外には伝えるべきではないという思想は一見ウパニシャッドの特徴の一つであるように思われる．しかしながら，最古のウパニシャッドであるブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド (Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad)[2] に関する限り，ブラフマン (brahman) なりアートマン (ātman) なりに関する秘説が問題になっているのではない[3]．ここで問題になっているのは秘説ではなくむしろ特別の混液 (mantha) に関する知識である．Mantha を枯れた切株の上に注げば枝も生じ葉も茂るであろう，というのがその意味であり，サティヤカーマ・ジャーバーラは弟子にこの混液の知識を秘密裡に伝えるのである．したがって，この箇所においてはかかる混液の知識を自己の息子または弟子以外に伝えてはならないということが意味されているに過ぎない．ブラフマンないしアートマンという深遠

な知識がかかる方法において伝えられるという記述はこのウパニシャッドのなかには全く見出されないのである．チャーンドーギヤ・ウパニシャッド (Chāndogya-Upaniṣad)[4] においては，ブラフマンに関する知識を長男あるいは弟子以外に伝えることが禁止されている．確かに，この箇所に関する限り，ウパニシャッドが秘説であることは確実であるように思われる．

それにもかかわらず，わたくしは若干の理由からウパニシャッドが元来秘密の教えを意味したという考えについて疑いを抱いている．**一つには**，かかる思想が古ウパニシャッドにおいては，この二箇所にしか残っていないという事実である．ブラフマンの知識を長男あるいは弟子以外の人に伝えるな，という考えは古ウパニシャッドにおいてはきわめてまれであって，これをもってウパニシャッドの基調が秘密の教えであるということはできない．**第二に**，わたくしはかかる考えのみではウパニシャッドの根本特徴が充分に説明され得ないということを指摘せねばならない．ウパニシャッドの知識は，師から弟子，父から息子にだけ伝えられるのでは決してない．それは夫から妻へ，クシャトリヤからバラモンへも伝えられるのである．あるいはまた，ブラフマンやアートマンの知識を得るために人は単独であるいは集団で賢者の許へ教えを乞いに行くこともある．その場合，弟子入りするとしないとにかかわらず，ウパニシャッドの新興思想は伝えられていくのである．しかし，ウパニシャッドの新思想が秘密裡にある人から他の人へ伝えられるという考え方に対して最有力な反証を提示するのは，ジャナカ王の宮殿で行なわれた**公開の討論・相互批判の集会**である[5]．この集会においては，ブラフマン・アートマンに関し詳しい説明ないし批判がなされたのであり，その場に居合わせた人々はウパニシャッドの新思想について公然と学ぶ機会にめぐまれたのであった．勿論，王の宮殿に集まった論客はそれぞれクル・パンチャーラの人々で，全員バラモン階級の出身であった．他の階級の人がこの討議に参加したという記録はない．しかし，たとえこの集会に出席したのがバラモンだけであったとしても，彼等は自由な雰囲気のなかで絶対者に関する討論・批判を行なったのであり，みな絶対者を公開の席で徹底的に論究し得る立場に置かれていたのであった．その間の事情をよく伝えるものは，ヤージニャヴァルキヤ (Yājñavalkya) が他の論客に対して語ったことばである．彼は次のように言うのである—希望があればわたくしに問うがよい[6]，と．あるいは一同が束になって問うもよい，と．ヤージニャヴァルキヤは，**問われさえすれば**，自己の知識，アートマン思想を惜しみなく白日の下にさらす用意があったのである．しかし，この討論会は自由と競争の原理—これをわたくしは**公開性の原理**と呼ぶ—に基づいて行なわれたにもかかわらず，若干の欠陥があったことは否定され得ない．ヤージニャヴァルキヤはガールギー女史に対して，あまり問い過ぎるな[7]，と言い，また彼は問い過ぎるシャーカリヤを呪ったのである[8]．このような欠点はあったが，ガールギーのような女性でさえ宮殿における形而上学的なトーナメントに出席することを許されたのであり，ヤージニャヴァルキヤのような大哲人を相手に一歩も譲らず自由に発言し得た事実によって，それはある程度補われるであろう．

要するに，ジャナカ王の宮殿においては，各人は自己の哲学的見解を公表することに努めたのであり，それを如何にして他人の眼から隠すかということではなく，むしろそれを何人にも理解され得る形においてどのように説明するかが彼の主要関心事であった．すなわち，ウパニシャッドにあらわれた哲学は，**討論・批判という形の火の試煉に耐えることを必要とした**のである．

ジャナカ王の宮殿における討論会に比較すれば規模と雄大さにおいて劣るが，ウパニシャッドの新思想が公開の席で論じられたことを示すいくつかの事実がある．一つはブリハッドアーラニ

ヤカ・ウパニシャッドおよびチャーンドーギヤ・ウパニシャッドにおいて示される王族 (rājanya) のパリシャッド (pariṣad) あるいはサミッティ (samiti)[9] である．人数は分らないが，パンチャーラの王族の集会でアールニの子シュヴェータケートゥはプラヴァーハナ・ジャイバリ王にみなの面前で論議をしかけられるのである．そして，王は彼に五火二道説をみずから進んで教えようとするが，彼は王族の面前で受けた屈辱に耐えかね，王の許をほうほうの態で逃げ去ってしまう．チャーンドーギヤ・ウパニシャッドの他の箇所 (I, 8, 1) においては，ウドギータ (Udgītha) の帰趣 (gati) に関してシラカ・シャーラーヴァテヤ，チャイキターヤナ・ダールビヤおよびプラヴァーハナ・ジャイヴァリの三人が集まって問答を重ねる．前二者はバラモンで後者はクシャトリヤであったらしいが，この三人は会合して公けにウドギータの帰趣を論じたのである．また，プラーチーナシャーラ・アウパマニヤヴァを始めとする5人のバラモンの学者は，アートマンとは何か，ブラフマンとは何かを探究しても答えを得なかったので，ウッダーラカ (Uddālaka) の許へ行くが，ウッダーラカもアートマン・ヴァイシュヴァーナラ（万人に共通するアートマン・普遍我）を知らなかった．そこで，彼等は全員で王族のアシュヴァパティ・カイケーヤのところへおもむくのであるが[10]，アートマン・ヴァイシュヴァーナラの新説が数人の間で探究され，彼等の面前で王によって教えられたことは注目に値いする．

自由討論や相互批判が公開の原理に基づくのは見易いことであるが，師と弟子，父と子，夫と妻，あるいは賢者と求道者の間の対話はどう解釈したらよいであろうか？　対話は果して秘説を伝えるための形式であったのであろうか？　別言すれば，それは第三者の眼から真実を隠蔽するための特殊の話法であったのであろうか？　世人に公表をはばかるような内容のものがウパニシャッドの対話の精神であったのであろうか？　わたくしの知る限り，かかる思想はウパニシャッドにはただの一箇所しか存在しない[11]．それはカルマン (karman) 思想に関してである．これはヤージニャヴァルキヤがカルマン（行為）に関して公けの席で論じるのは不適当であると判断したために他ならない．これに反し，他の場合に行なわれた対話は決して第三者の眼を恐れたものではない．もしかりにウパニシャッドの哲人が自己の思想を他人に伝えたくないと思ったとしても，結局はそれを公けにせざるを得なかったのである．なぜなら，「クシャトリヤは求められれば，かつてバラモンに伝えられなかった重要な知識でさえ拒否し得なかった」からである[12]．

古ウパニシャッドにおいて，とくに有名なのは，ウッダーラカとその息子シュヴェータケートゥ[13]およびヤージニャヴァルキヤと第一夫人マイトレーイーの対話であろう．その両方に通じていえることは，両哲人が人間生活の現実に即して比較と比喩によって人間生活の最高理念・価値を伝えようとした点である．ヤージニャヴァルキヤにしてもあるいはまたウッダーラカにしても相手が納得するまで懇切丁寧に教示するのである．ヴィデーハ国のジャナカ王とヤージニャヴァルキヤが対話したとき，王はヤージニャヴァルキヤの弁舌に魅了され，象のような牡牛1頭とともに牝牛を1000頭与えようと申し入れたが，後者は，わたくしの父は充分教えることなくして報酬を受け取るべきではないという意見であった，と述べ[14]，王の理解が不充分であることを婉曲に彼に思い知らせ，徹底的にウパニシャッド的絶対者を追求したのである．また，ジャナカ王はヤージニャヴァルキヤから**如何なる質問をしてもよいという許可を得ていた**のであり，彼は好むと好まざるとにかかわらず王に人生の最も深遠な問題，あるいは同じことだが，ウパニシャッドの新興思想について語らざるを得なかったのである．

また，バラモンのライクヴァがジャーナシュルティ王と対話したのも，もとはといえば王がラ

イクヴァから真実を得ようと努めたからに他ならない[16]．この場合，両者は師弟の関係にはなく，道を求めるものが賢者を尋ねて教えを乞う場面に過ぎない．ところで，師弟関係で最も興味深い実例の一つはおそらくサティヤカーマの場合であろう．サティヤカーマは母が諸家に召使いとして働いていたときに生まれ，父がどんな家族[17]の人か知らなかった．しかし，サティヤカーマはこのことを正直に語り，真実を愛するものであるがゆえにガウタマの許に弟子入りすることを許された[18]．バラモンでないものは真実を語らないであろう，しかるに，お前は真実を語った，だから，お前はバラモンである—これがガウタマの論法である[19]．

神話的・伝説的な性質のものであり，歴史的事実には属しないが，プラジャーパティの許へアートマンの知を求めてやってきた神々の代表インドラと悪鬼の代表ヴィローチャナの場合も全く同様である[20]．実に，インドラは「プラジャーパティの許にさらに5年間とどまり，始めてアートマンの奥義を授けられたのである．否，そうではない．実に，101年間プラジャーパティの許にとどまった後，インドラは長くて苦しい精神的格斗の結果，与えるのを惜しむプラジャーパティの手からそれをもぎ取ったのであった」[21]．

以上，いくつかの対話を通じていえることは，経験の裏づけに基づいてウパニシャッドにおいて哲学的・宗教的探究が試みられ，かかるものの表現形態として対話が理解されたことであろう．対話においては，ある一者が他のものに状況に応じて思想を伝えるのであるが，**求められて教える場合とみずから進んで教える場合がある．**また，同一の人物が両方のケースをかねていることもある．求められて教える場合のいくつかを挙げれば，ガールギヤに対するアジャータシャトル王，マイトレーイーに対するヤージニャヴァルキヤ，ガウタマ（シュヴェータケートゥの父）に対するプラヴァーハナ・ジャイバリ王，ジャーナシュルティ王に対するライクヴァ，サティヤカーマに対するハーリドルマタ・ガウタマ，サティヤヤジュナ・パウルシィ等6人のバラモンに対するアシュヴァパティ・カイケーヤ，ナーラダに対するサナトクマーラ，インドラ神に対するプラジャーパティの場合であろう．シュヴェータケートゥに対する父ウッダーラカの教えもそうであろう．これに対してみずから進んで教えようとした，あるいは教えた例はシュヴェータケートゥに対するプラヴァーハナ・ジャイヴァリ王，ウパコーサラに対するサティヤカーマの場合等であろう．シュヴェータケートゥはジャイヴァリ王から教えようと言われたのに，教わることを欲しないで逃げ去ったのであり，これと対照的なのは，教えることを欲しない師サティヤカーマがみずから進んで教えるようにしむけたウパコーサラの場合である．いずれにせよ，求道者に真実への欲求もなければそれを把握する能力・うつわも欠けているとすれば，師がかかる人にウパニシャッドの思想を伝えようとしないのは当然である．しかし，このことはウパニシャッドが元来秘説であることを意味するものでは決してない．なぜなら，ウパニシャッドは秘説なんかではなく，真剣な思索と体験によってのみ獲得され得べき性質の知識であるからである．

結局，われわれは古ウパニシャッドの時代には熱心に乞い求めるものには知識が与えられたことを知るであろう．すくなくとも最も古いウパニシャッド（ブリハッドアーラニヤカとチャーンドーギヤ）に関する限り，知識を求めて拒絶された例は見出されない．ウパニシャッドにおいては，パンを求めて石を投げ与えられるということはなかった．というよりはむしろ真理を求めるものは真理の保持者からそれをもぎ取った，という方が正しい．賢者は相手が真剣に真理を追求ししかもそれを理解する能力があると確信した場合には，いわば独占的な自己の知識を彼の自由にさせようという用意があったのである．ウパニシャッドを特徴づけるものは**自由で捉われるこ**

とのない思索であり，異常なまでの知識に対する関心であった[22]．別言するならば，ウパニシャッドにおいて到達された知識は原則としてこれを**真剣に求めるものに対して公然と開かれていた**のである．ウパニシャッドは中世的思惟の産物でもなければ，自己閉鎖的な僧院のなかで生まれたものでもない．それは古代思想の結晶である．それは西紀前800年ないし700年頃に成立した思想であり，古代人特有のあの精神のひろびろとした開放性・一面性の産物なのである．

II. ウパニシャッドの理想

ウパニシャッドの実践目標は，要するに，不安 (bhaya) の解消である[23]．世界内における自己の不安の解消は古代インド人によって解脱 (nokṣa) と称せられるものであり，彼等はこれをブラフマンないしアートマンによって達成しようとしたのである．古代インドにおいては，人々の生活目標が自己自身へ向けられたことは注目すべきことである[24]．ヤージニャヴァルキヤとその第一夫人マイトレーイーとの間にかわされた会話において奇妙に感じられるのは，夫も妻もいささかも別離を悲しんでいるようには思われないことである[25]．永遠の別離に際して夫人が夫ヤージニャヴァルキヤに投げかけた問いは夫の今後の安否ではなく彼女自身に関することであった[26]．彼女の念頭を離れなかったのは，彼女自身の不死の希望 (amṛtatvasya āśā) に他ならなかった．他方，ヤージニャヴァルキヤ自身もまた自己のためにアートマンを求めて家を去り妻を棄てる．かかる行為はわれわれの法，われわれの道徳，われわれの感情をもってしては理解されないけれども，それは近代社会が人間的結合，社会的関係の上に築かれていて，ヤージニャヴァルキヤ時代の社会と異質のものであることによるのであろう．ウパニシャッド的世界観によれば，対社会，対人間関係は第二義的な価値を有するに過ぎない[27]．換言すれば，**ウパニシャッドの目標は自然の苦しみ（飢え・渇き・苦しみ・悲しみ・妄想・老・死等）から脱却する点にあった．**古代インド人の関心は，かかる自然的諸条件の克服に向けられていたのであり，アートマンの探究というも，あるいはまたブラフマンの探索というも，結局，かかる自然苦そのもの，またはそれから生じる心理的な不安・恐怖を絶対者の力を頼って解消することを意味したのである．世界内存在である局限された自己は，まさに閉ざされた存在であるがゆえに心の平安を得ることができず，絶対者のなかに自己存在の基礎を求めたのである．ウパニシャッドの哲人は絶対者のなかに真実の自己を見出したのであり，また逆に，絶対者を自己の本質・自己のなかの自己と感じたのである[28]．彼等は絶対者が自己以外のどこかに存在するとは考えなかった．それは自己存在の核心であるとみなされたのである．すなわち，インド的に表現すれば，このわたくしがブラフマン・アートマンとなったのである．かかる絶対者は知 (vidyā) であるといわれる．自然苦あるいはそれと不可避的に結合している心理的不安を解消する唯一の手段は知である．

勿論，古代インド的生活目標は多様であり一元化することはできないが，わたくしは不安の解消をウパニシャッド的な理想あるいは生活目標と考えるものである．

ヴィデーハ国王ジャナカとヤージニャヴァルキヤの対話は，要するに，**そうではない，そうではない** (neti, neti) というアートマンの否定的把握に終るのであるが，ヤージニャヴァルキヤの終局的な悟りは不安あるいは恐怖の解消である．だから，最後にヤージニャヴァルキヤは王に対し，

ジャナカ王よ！　お前は恐れを知らない状態に達した[29]，

と語ったのであった．そして，古代インド的思惟によれば，かかる不安・恐怖をひきおこすの

は死であり老いであり悲しみであった．要するに，それは自然苦であった．このような自然苦[30]を克服すること，それに超然たる態度でのぞむことがウパニシャッドの哲人の生活目標であった．

……そこでは彼は善によって従われず，悪によって従われず，実に，彼は一切の心の悲しみを越えている[31]．

かくの如く知るものは悪を離れ，老いず，飢えを離れ，渇きを離れたもの，ブラフマンとなる[32]．

それは老いず，死なず，恐れを知らず，そして不滅のブラフマンである．ジャナカ王よ！お前は恐れのない状態に達した，とヤージニャヴァルキヤはいった……[33]

これが大いなる，不生のアートマンである．不老不死，恐れなき不滅のブラフマンである．ブラフマンは恐れを離れている．実に，かくの如く知るものは恐れなきブラフマンとなる[34]．

……アートマンを知っているものは悲しみを越えている，と……[35]

……これがアートマンである，それは悪を滅し，老いず，死なず，悲しまず，飢えず，渇せず……[36]

……この眼のなかに見られる人間がアートマンである，と彼はいった．これは不死であり恐れを離れている，これがブラフマンである……[37]

以上の諸例によっても明らかなように，**ブラフマンなりアートマンなりを知ることは老・死・飢え・渇き・悲しみ等個人存在に固有の自然の苦しみを解消することであった．**換言すれば，それは**人生における不安の解消**に他ならない．しかし，ここで注目すべきことは，ブラーフマナ時代から継承された思想が古いウパニシャッドのなかにかなり濃厚に残っているにもかかわらず，天上的・地上的願望がヤージニャヴァルキヤにおいては—すくなくともジャナカ王との対話の結論の部分について見る限り—問題とされていないことである．ウパニシャッドにおいては，人はもはや積極的に行為を通じて自己の願望を成就しようとはしない．しかも，心の悲しみを去り，老死を克服する場合でさえ，それに代わるべき積極的な善を期待しているのでもない．不安を解消して梵界 (brahma-loka) 等の天界におもむくということが望まれているのでもない．**ただただ不安を解消し，苦を除去することが古代インド人の理想であった．**ブラフマン・アートマンを唯一の拠り所として，それによって自己存在の局限性を破り，ゆるがしがたい自己信頼を獲得すること—これがウパニシャッドにあらわれた人間の理想である．そして，このような理想は後世のインド思想に決定的な影響を及ぼしたのであり，実際問題として，原始仏教もまたこのような古代的理想を前提としている．いずれにせよ，ウパニシャッドの思想は元来宗教的な色彩を濃厚に帯びているのである．

むすび

ウパニシャッドの根本特徴としてわたくしは知識の公開性の原理および真実の自己を通じての不安の解消を挙げた．しかし，この二つのみではウパニシャッドの性格をあますところなく描くことはできない．本論文では省略したが，知識（upāsana, vidyā, jñāna, vijñāna 等）の問題が論じられねば，われわれはウパニシャッドの全体的な印象を得ることができないのである．さらにまた，ブラフマン即アートマンであるといういわゆる梵我一如説[38]を取り上げない限り，人はウパニシャッドの根本的な特徴を述べたことにはならない，と考えるかも知れない．けれども，私見によれば，ブラフマン・アートマンの問題はウパニシャッドの根本特徴であるというよりもむしろそれの核心であり，かつ精髄である．それはウパニシャッドの最も重要な内容である．ウパニシャッドのブラフマン・アートマンは後にヴェーダーンタ（vedānta）学派によって発展させられるのであり，われわれはシャンカラやラーマーヌジャ等との連関においてこの問題を考察せねばならないのである[39]．

内容の点に関してウパニシャッドの特徴を秘説の代わりに connexion, corrélation（ルヌー等）に求める説が最近学界では注目されるようになって来た．大宇宙のできごとと小宇宙のできごとが合致する，あるいは，連関があるという思想がかかる説の根底にあるものと思われる．わたくしはこのような考えを否定するものではない．確かに，ブラーフマナ的な思惟によれば，祭壇上での祭官の祭りの行為と宇宙的な事象の間には連関があるのであり，かかる祭りの思想がウパニシャッドのなかに残存し，ウパニシャッドに大きな影響を与えたことは否定されまい[40]．しかし，わたくしの考えによれば，このような connexion, corrélation 説[41]以上にウパニシャッド的と思われるのは，絶対者の探究のしかたである．**ウパニシャッドの哲人は唯一・絶対のみを追求し，いわばこれに熱中したが，これと異なる世界存在を否定することはしなかった．彼等はいわば存在の二重構造を認めたのであった．**彼等にとって価値があるのはブラフマン・アートマンのみであり，それが最高の存在である．しかし，日常的な世界，現実の存在は低次の存在，影の存在であった．しかし，それは非存在でもなければ夢幻（マーヤー）でもなかった．わたくしは，思想内容に関する限り，ウパニシャッドの根本特徴は存在の二重性の肯定と高次の存在への限りなきあこがれに求められると思う．わたくしは，『中村元博士還暦記念論集』（1973年11月，東京 春秋社）のなかの拙論「ヤージニャヴァルキヤの存在論」において，このようなウパニシャッドの解釈を試みたのである．いずれにせよ，ウパニシャッドの根本特徴は，当時の社会や文化との緊密な連関において解明される必要がある．この点については，他日機会があれば論じたい．

文　　献

（1） Upaniṣad は普通 upa-ni という前接辞と sad という語根の結合から成るものと考えられている（Macdonell and Keith, *Vedic Index*, Vol., I, p. 91）．しかし，ウパニシャッドにおいては「侍坐」「近坐」「秘密の会坐」の意味において使用された例は全く見当らない（Max Müller, *SBE*, Vol., I., p. IXXX）．オルデンベルクは upaniṣad を upāsana（念想）に帰せしめている（*Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Vol. 50, 1896年，pp. 458—462 参照．

（2） 学会においてはドイッセンの推定にしたがい，初期ウパニシャッドはブリハッドアーラニヤカ，チャーンドーギヤ，タイッティリーヤ，アイタレーヤ，カウシータキ，ケーナの順で成立したと認められているが，キースはアイタレーヤ・ウパニシャッドが最古で 600—550 BC. 年頃成立したと考えた（中村元博士，初期ヴェーダーンタ哲学，岩波，pp. 14—18 参照）．ここでは通説にしたがい，ブリハッドアーラニヤカおよびチャーンドーギヤの両ウパニシャッドを最古ニウパニシャッドと認め，それらがすくなくともブッダ以前に成立したものであることを指摘するにとどめる．なお，以下の論述におい

ではわたくしは資料をこの二つのウパニシャッドに限定した．そして，原典としてはオットー•ベートリンクの *Bṛhadâraṇjakopanishad in der Mâdhjaṁdina-Recension*, Leipzig, 1889 および *Khândogjopanishad*, Leipzip, 1889 の両テキストを使用した．

(3) Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad (以下 BĀU と省略), VI, 3, 20.

(4) Chāndogya-Upaniṣad (以下 ChU と省略), III, 11, 5—6 参照．なお，シュヴェーターシュヴァタラ•ウパニシャッド，VI, 22, マイトリ•ウパニシャッド，VI, 29 参照．

(5) この点に関してはすでにヒルレブラントが言及している (*Über die Upanishaden, Zeitschrift für Buddhismus*, Bd., 4, 1921 年，p. 43.

(6) BĀU, III, 9, 29.

(7) ibid., III, 6, 1.

(8) ibid., III, 9, 28. シャーカリヤはヤージニャヴァルキヤに呪われ，そのため彼の頭は地に落ちたのである．盗賊が彼の骨を他のものと間違えて持ち去ったという記述が見られる．

(9) ibid., VI, 1, 1 および ChU, V, 3, 1. Pariṣad はこの場合哲学に関するアドヴァイザーの集まり (Macdonell and Keith, *Vedic Index*, Vol. I., p. 497) を意味したものと思われる．Samiti もこの場合 pariṣad と同じ意味であろう．Pariṣad に関しては *The Vedic Age*, Vol. I., p. 484 (Apte の論文) 参照．なお，samiti と pariṣad については Wilhelm Rau: *Staat und Gesellschaft in alten Indien*, 1957 年，Otto Harrassowitz, Wiesbaden, p. 82 にも言及されている．Samiti についてはこの他 V. P. Varma, *Studies in Hindu politcal thought and its metaphysical foundations*, Second Edition, 1959, pp. 19—20 参照．ヴェーダ時代における samiti と sabhā の関係は問題のあるところであるが，ここでは前者は単純な集会と理解したい．

(10) ChU, V, 11, 1 参照．

(11) BĀU, III, 2, 13. アールタバーガとヤージニャヴァルキヤが対話したとき，後者は前者の手を取ってバラモン衆の前から離れて二人だけでカルマ (karman: 行為) について秘密裡に論じたのである．

(12) 「古ウパニシャッドにおける若干の問題」p. 135. BĀU, VI, 1, 11 および ChU, V, 3, 7 参照．

(13) 拙論「ウッダーラカ哲学の究極にあるもの」pp. 150—153 (印度学仏教学研究第18巻第1号　昭和44年12月参照．

(14) BĀU, IV, 1, 4 以下参照．この場合，彼が1000頭の牛を受け取る前に拒否したのはバラモンの慣習と連関があるように思われる．誰であろうとバラモンは祭官への報酬 (dakṣiṇā) を受け取ろうとするときにはそうする前に17回拒絶せねばならなかったといわれる: A, Weber, *Indische Studien*, Vol., X, Collectnea über die Kastenverhältnisse in den Brâhmaṇa und Sûtra, p. 56.

(15) BĀU, IV, 3, 1.

(16) ChU, IV, 2, 1—5.

(17) ibid., IV, 4, 4. ここでわたくしが家族と訳した原語は gotra. それは家族とか氏族とかを意味する．Gotra は父方の親縁関係をあらわす．サティヤカーマの場合，父方の親縁関係が不明であった．カストに関しては拙論「インド文明とカスト制度」(『民族文化』, Vol. 8, No. 3, 1972, アジア民族協会) において略説．

(18) ChU, IV, 4, 5.

(19) ibid.

(20) ibid., VIII, 7, 2. なお，ヴェーダの神格プラジャーパティについては拙論「ブラーフマナの創造神 (Prajāpati) の思想的展開」(印度学仏教学研究第17巻第2号　昭和44年3月) 参照．

(21) 湯田豊•伊藤瑞叡共著『インド思想および仏教』第1，昭和47年12月，東京，錦正社，p. 169.

(22) BĀU, IV, 2, 6; ChU, IV, 2, 4. なお，拙論「古ウパニシャッドにおける知識論」(p. 45 以下) 参照．

(23) 中村博士はその境地を「絶対の安心立命の境地」と言っている: 前掲書，p. 140.

(24) Oldenberg: *Die Lehre der Upanishaden und die Anfänge des Buddhismus*, p. 174.

(25) D.J. Stephen, *Studies in early Indian thought, London*, 1918, p. 78 参照．

(26) BĀU, II, 4, 2.

(27) Oldenberg; *Die Kultur der Gegenwart*, p. 56. 中村元選集•第1巻『東洋人の思惟方法』I, p. 140 以下参照．

(28) この点に関しては拙論 *Einige Bemerkungen zum ātman in der Bṛhadāraṇyakopanisad* (印度学仏教学研究第16巻第1号　昭和42年12月) p. 49 参照．なお，本論文においてわたくしはブリハッドアーラニヤカ•ウパニシャッドにおけるアートマンの問題をある程度詳しく論述した．

(29) BĀU, IV, 2, 6: abhayaṃ vai janaka prāpto 'sīti.

(30) かかる自然苦がインド的な行為観 (karman) あるいは無知 (avidyā) をその背景としていることは見易いことである．カルマや無知等については湯田・伊藤共著『インド思想および仏教』第一「インド倫理学の主要問題」(p. 58 以下) 参照．

(31) BĀU, IV, 3, 22.

(32) ibid., IV, 4, 28.

(33) ibid., IV, 4, 30.

(34) ibid., IV, 4, 31.

(35) ChU, VII, 1, 3.

(36) ibid., VIII, 1, 5. なお，ibid., VII, 1, 3; 7, 1 参照．ChU, VIII, 4, 1 によれば，アートマンは提 (setu) で，かつそれは境界 (vidhṛti)．これを昼夜・老死等は越えない．

(37) ChU, VIII, 7, 3. なお，ibid., VIII, 3, 4 参照．

(38) 私見によれば，梵我一如説はかならずしもウパニシャッドの最大の特徴ではない．たとえば，梵我一如の代表とみなされるシャーンディリヤもあるいはまたウッダーラカもブラフマンとアートマンの同一を説いているとは思えない．その理由については前掲の「ウッダーラカ哲学の究極にあるもの」および「シャーンディリヤのアートマン観」—チャーンドーギヤ・ウパニシャッド III・14—(印度学仏教学研究第20巻第1号 昭和46年12月) pp. 178—183 参照．

(39) インド哲学最大の哲学者シャンカラ (Śaṅkara) のアートマン観については，拙論「シャンカラとヘーゲル」(鈴木学術財団・研究年報，1973年10月，9号，pp. 34—51) 参照．

(40) 古代インドの祭りの思想については Alfred Hillebrandt: *Ritualliteratur* (*Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde*, Herausgegeben von G. Bühler, III. Band., 2. Heft) 参照．なお，拙論「シャタパタ・ブラーフマナに現われた祭り (yajña) の思想」(東方学 第37輯 昭和44年3月) pp. 126—145 参照．

(41) L. Renou: *Littérature Sanskrite* (glossaires de L'hindouisme, Fascicule V, 1946, Paris) p. 132.